

〔論文〕

## 読書指導者が抱く読書指導観に関する一考察

—図書館補助員Nさんへのインタビューから—

滝 浪 常 雄

名古屋学院大学スポーツ健康学部

### 要 旨

本研究は読書指導の実質化を図るために、教員の読書指導支援プログラム開発の一環として、取り組んだものである\*。いわゆる読書指導に長けた指導者が読書指導観として「どんな思いや考え、願い」を持って、読書指導を行っているのかを明らかにしようとした。今回H市立H中学校の図書館補助員Nさんの読書指導観についてインタビュー調査をもとに、ライフストーリー分析を行った。本稿においては、Nさんの(1)「図書館補助員に就くまでの経緯」(2)「読書指導観の形成過程と内実」(3)「読書指導実践」に3部に分けて分析考察した。Nさんは、生徒に対してかなり質の高い読書指導を行っており、その読書指導観は確固たる信念に裏付けられていることが分かった。その内実も生徒との信頼関係、生徒の居場所、生徒の直接的応答関係によって明らかになった。また生徒に対して読書好きにするための創意工夫された図書館経営実践と読書指導実践から得られた知見は、読書指導に悩み戸惑う教員へ重要な示唆を与えてくれるものと考えられる。

キーワード：読書指導 読書指導観 ライフストーリー分析 学校図書館補助員

## Analysis in the Idea of Reading Instruction Formation

—From the Interview of the School Librarians Assistant—

Tsuneo TAKINAMI

Faculty of Health and Sports

Nagoya Gakuin University

---

\*本研究は2016年度名古屋学院大学研究奨励金による研究成果の一部である。発行日 2018年2月28日

## 1. 問題の所在

わが国の読書教育は、全国的な展開がなされ、子どもの読書活動推進計画はすでに 2001 年に実施され、地域をあげて読書教育に取り組んでいる<sup>1</sup>。

公立図書館はさらなる充実がなされ、学校図書館としても、いわゆる「読書センター」「情報センター」「学習センター」の機能を持った施設として運営され、2003 年には 12 学級以上の学校に司書教諭が必置となった。

こうして全国的に学校教育の中でも朝読書、読み聞かせ、ブックトークなど、さまざまな取り組みがなされている。現行「平成 20 年学習指導要領解説 国語編」においても「読書活動の充実」が規定され、国語科教育においても読書指導が積極的に取り組まれるようになっている。また、調べ学習においては資料を読み、どう使うかといった学習の支援ツールとしての読書が重要視されている<sup>2</sup>。

しかし、一方で、教員の読書指導への不安感は払拭されていない。国語科学習や他の調べ学習における学習を支える読書活動は日々の活動の中で実践はしても、いわゆる楽しみとしての読書へ誘う指導については自信がなく、不安を抱く教員が多い。

また、司書教諭の必置が規定され、大学の課程でも選択制ではあるが、司書教諭の資格を取得する学生が多く、教員採用の必要要件の一つに挙げている地域が 28 県（または政令都市）ほどある。それほどに司書教諭に課せられた役割は大きく、現在学校現場における司書教諭の配置率はかなり高い数値である。

ただ学校現場では大概学級担任が兼任することが普通であり、学級経営との両立は難しいという問題点を指摘する声もあると言われる<sup>3</sup>。

無論、図書館経営と学級経営を兼任して生き生きと取り組んでいる教員もいるし、学校図書館経営がうまく機能している学校もあるのも事実である。

そこで、そういった読書指導に長けた教員が有している読書への基本的な考えである読書指導観や指導実践を明らかにしていければ、読書指導を得意としていない教員への支援ができるのではないかと考えたのである。

本研究では、読書指導を行う最前線の当事者である教員の読書指導力の向上を最終目標としているが、本稿の分析、考察では読書指導力形成のためにどのような読書指導観を持って実践に取り組んでいるかを明らかにしていきたいと考えている。

そこで、H市のN中学校（以下N中）で図書館補助員である、読書指導の当事者としての語りを分析しながら、どのような経緯で現在の仕事に就き、どのような実践をしてきたかを探りながら、総体として、読書指導観を形成しているか、その視座を得たい。

対象者は図書館ボランティアに 10 年間従事しているNさんである。

本研究の方法としては、インタビュー調査を行い、ライフストーリー分析の方法を選んだのは、質的な研究として、当事者の声を聞くことにより「社会的現実」といわれるリアルな読書指導の内実を見ることができると考えたからである<sup>4</sup>。

## 2. Nさんの語りの分析

### 2.1 Nさんの語りまでの経緯

インタビュー調査

日時：2016 年 6 月 6 日（水）午前 10 時から午前 11 時まで

場所：H中学校図書館

対象者：図書館補助員Nさん（女）50代

本調査にあたって、対象者としてNさんを選択したのは、長く友人関係にあったM氏の紹介によるものである。いわゆる機縁法といわれる知り合いをたどるという方法であるが、インタビューといった直接人物に出会うということにおいては重要な方法である。なぜなら、全くの他人との間にラポール関係が構築できるわけではないからである。したがって、知り合いの紹介が関係を作る上で最良の手段である。

Nさんの場合、M氏が勤める中学校に勤務しており、もともと明朗闊達な性格であり、教員や生徒とも親密な関係を築いているとのことであった。そして、NさんによってH中の学校図書館は常に活気づいており、なおかつ地域にも知られた存在であり、H中の重要なスタッフであると、M氏の言を得ている。そこで、M氏にはNさんとアポイントを取るための仲介者になってもらい、調査の趣旨を事前に話して了解を得ることができた。インタビュー当日は、初対面とは思えないほどに、ラポール関係がすぐ築けた。大変話が弾み、読書指導観における多くの視座、知見を得ることができた。

## 2.2 語りの分析

語りの分析に関して、デジタルレコーダーによって、インタビューを録音し、逐語記録を作成して、必要な文章を抜き書きしている。

個人情報や学校情報に関わることが多いので、地域が特定されないように、また人物も特定されないようにイニシャルで表記し、出来事も概略にとどめることにした。また、口語体であるため、わかりにくいと思われる方言は共通語に修正し、意味が通るように（ ）で語句を

補った。また、ゴシックは筆者の質問、あいつちである。

なお、本記録については、Nさんに事前に逐語記録を見ていただいて、加筆修正し了解を得ている。

下線は筆者によるものである。

### (1) 「Nさんの図書館補助員に就くまでの経緯」

まず、NさんのH中学校で現職に就くまでの経緯を語っていただいたが、ここでは概略に止める。

Nさんは、もともとH中学区に住んでいて、幼稚園の教員をしていたが、子育てのために辞職した。しばらくして、学校図書館補助員の話があり、始めたとのことであった。隣のK小に勤め、H中に来たが子どもがH中に入るので、一旦I小に異動し、再びH中に呼び戻される。2016年（インタビュー当時）で16年目に入るという。かなりのベテランと言っていいだろう。もともと本が好きであることや幼稚園の教員経験（読み聞かせなど）が、この職に合っていると考えたのではないと思われる。

#### ○独学で図書館運営を学ぶ

Nさんは、この経緯の中で、独学で図書館運営を学んだことが語られる。

H中に行ってください、座っているだけでいい。（しかし、その図書室は）鍵がかかっている、人は来ない、だれともしゃべらないので、当時の校長にオープンにしている（と言われたので）、本棚を自分なりに変えた。知り合いが図書館にいたので、研修に出してほしい。校長に、H中、勉強しながら本のカバーかけ、並び、人の流れ、児童書のところをやらせてもらって…

下線部にあるように、当時のH中の図書室は

図書室としては不十分な状態だったとある。おそらくH中に限らず、一般的にも学校図書館という場は学習の場というより、図書の貸し出し業務がほぼ中心の運営の場であった。図書館経営に有能な教員がいれば利活用されていたであろうが、H中のように学校図書館が閉鎖された空間になっていたようなところもあったと思われる。

2001年に「子どもの読書活動推進計画」実施に伴い、市が整備に取り組み始める。16年前はおそらく「国民読書年」に向けて、各地域で図書館教育、読書教育が盛り上がりを見せ始めた時期だと考えられる。そして事業の一つとしてH市は図書館補助員を各小中学校に配置した<sup>5</sup>。しかし、配置はしたものの、実際の活動はこれからという現状だったのであろう。立ち上がり当時、補助員たちが図書室の状況に戸惑っていた状態が、Nさんの語りを通して垣間見られる。しかし、このスタートがNさんの図書館経営への意志を固めさせたことも事実である。

## (2) 「読書指導観の形成過程と内実」

### ○無理に本を勧めない

#### — 生徒との信頼関係が第一 —

現職に就き始めの時期が語られた。生徒の読書に対する実態から、Nさんが図書館経営とともに、生徒への読書指導への方針、願い、信念が語られていき、まさに読書指導観が見て取れた<sup>6</sup>。

(自分がH中学に) 来たころは (生徒が)

2, 3人、そのころは来た子には①無理矢理本を勧めないと決めていた。「なんか楽しいことある？」ってその子に話しかけて、私という人間を知ってもらおうよう努力してました、②やっぱり信頼関係がないと、信頼しない人が勧めるものは読もうとしないんですよ。な

んでもそうですが疑ったり、警戒心って子どもってあるんですよ。—中略—だから私はそういうことはしない、偉そうなことは言わないし、同等というか、なんかある、③話がしやすい人と思われることで、仲良くなっている、図書室におもしろい人いるよ (と思われることで)、みたいな感じで徐々に人が集まり出したんですよ、やっぱり、子どもっていうのは、おもしろいところとかおもしろい人のところには寄ってくるので、そのことをしようと思っていました。そして次に本を整理して、私がどこに何があるか分からなければ、聞かれた時に、だから私がI小にいたときもすべて本棚を出して私の一からやることから始めていったんですよ、…

下線①と②から、生徒との信頼関係が読書指導の第一と、すでに方針を決めて接したことが分かる。それは信念とも言い換えていいかもしれないほど、強い意志を感じた。教育において、教育者と生徒との関係において、信頼関係は必須のものであることを、Nさんは知っていたことになる。おそらく幼稚園の教員をしていた経験や子育ての経験が要因として考えられる。しかも下線③では、自分との関係を築く過程で、生徒とのコミュニケーションを巧みに行っていたのだから何が伺われる。結果として生徒たちを図書室に向かわせているわけで、その手立ては注目に値する。

### ○私のやり方で整理した本棚

#### — 自分の居場所づくり —

次に語ったのは、自分の居場所としての図書室である。自分はI小の図書室ではきちんと整理していたと語った後、

でも、私のやり方ではなかったもので、(本

がある場所が) 私がそこにあるここにあるっ  
ては言えないですよ、④そうだと、私の  
本棚ではないので、私がよそ様っていうか、  
私の居場所じゃないんですよ、分かります?  
そうすると私も居させられてる、ていうふう  
になってしまうので、それじゃあない、まず  
そこがいちばんです、本棚がいちばん、で、  
⑤私がいつも楽しく図書室に居(ら)れて、  
私が本をみたくなるようなところなら、きつ  
と他の人も来やすいだろうし、本を借りてい  
くだろうなあっていう気持ちで、やっている  
ので、

Nさんにとっては職場であると同時に、自分  
が心地よく仕事ができる居場所を目指して図書  
室経営に乗り出している。下線④の特に「居さ  
せられている」という言葉に象徴されている感  
覚が、Nさんの図書室へのこだわりを感じると  
ころである。下線⑤では自分が心地よく居られ  
る場所こそが、生徒にも心地よく居てもらえる  
場所であると思っている。これもNさんの信念  
と呼ぶべきものである。

本がきちんと整理され、図書館員が本の配架  
をすべて把握していたとしても、しよせん「居  
させられている」という感覚では、読書指導も  
させている、させられているという硬直した相  
互関係になっていくのではないだろうか。やは  
り、そこに自分が、心地よく居るといふ感覚が、  
図書室という空間をも自分のものにしていく  
ことが必要なかもしれない。

○自分が心地よい場所は、生徒にも心地よい居  
場所

上記の自分の居場所であることが生徒にとつ  
ての居場所にもつながると語り、その成果が次  
に語られる。

そう、(毎日子どもはたくさん借りに来て  
いるんですか。) 来すぎちゃって、時々生徒  
指導の先生に昼休みにいてもらうこともあ  
ります、問題を抱えている子は(そういう子  
も入ってくる。) そうそう(居心地いいんだ  
ね、きつと。) ⑥ある日、緑の羽を背中に付  
けられたんです。そのことを、ほかの先生に  
話をしたら「だれもH中でそんなことをされ  
る先生はいないよ。ある意味仲が良くて幸せ  
だね。」って言われたんです。生徒との関係  
が先生でもなく、ただのおばさんでもない、  
そういう人が学校の中にも、いいと思  
います。まあ、⑦でもなんとなく毎日来ている  
子もいるし、うろろろしている子もいるの  
で、そういうことも大切なので、(大体昼休  
みですか。) いやいや休み時間、音楽室、美  
術室があるので、まあ理科室も下にあるの  
で、特別教室に来たときは、ちょっと寄って  
行くような感じですかね。⑧とにかく図書室  
に人が来ないと話にならないじゃないです  
か、

図書室が生徒の居場所としての証左は、下線  
⑦で語ったように、昼休みだけでなく、休み時  
間、教室移動の際にもNさんに声をかけていく  
生徒の姿があることで分かる。また、友人関係  
のように信頼関係が醸成されたことが下線⑥で  
語られている。Nさんが生徒に受け入れられ、  
図書室が本の貸し借りの場だけでなく、教室以  
外の居場所を求める生徒の姿があり、これは図  
書室、図書館が安らぐ癒やしの場所としての機  
能があることを再認識した<sup>7)</sup>。

○自分が読んで勉める

— 本を介して応答関係を築く —

実際の図書の勧め方にも、Nさんが本と読者

をつなげようとする強い意志が垣間見られる。

自分が読みたい本がそこにはないと、やっぱりなあんだってなっちゃうし、私一人の力ではやっぱり無理なので、⑨こんな本おもしろかったって声がいっぱい聞けた方がいいと思うし、そうすると私一人じゃなくて、友達からも「この本がおもしろかったから読んでみなよ」って、返すときに言ってくれば、その本をまたその子が借りてくれるだろうし、⑩さっきも先生が来てくれました。「ああ、」おもしろかったよ」って言ってくれました。先生も借りていくので、そうすると、先生が「この本おもしろかったよ」と教室で紹介してくれたら読書の輪が広がっていくと思います。（子どもにも常連さんみたいのっています？）いますいます、もちろん毎日、今日も朝から常連さんがいますけど、私は月水金しかこれないので、⑪まあそのときには、その子が読んだものは大体分かるので、「次はこの本読んでみるといいね」とすすめています。

下線⑨は生徒が読みたいと思われる本を並べ、しかもそれを読んだ生徒の声を聞くことで、他の生徒へ口コミとして広がったことを示している。それによって、読者が増えていくのだと考えている。実際、インタビュー時に、休憩時間に入ると、生徒数名が本を借りに来る。即座に生徒の名前を呼び、返却した本の感想を聞いたり、カウンターに並べてある本を示して「これ、おもしろいよ」と勧めたりして、生徒と応答する姿が見られた。

また、下線⑩教員とも関係を築き、教員にも読書を勧め、教員が発する感想の声が直接生徒に伝わることで「つながっていけばいい」と言

っている。本と読者をつなげるために、本を介して応答関係を築くことがNさんの信念と言えるだろう。

#### ○本を読む意味

1年生へのガイダンスの様子を語る中で、Nさんの読書に対する思いが最も強く感じられた場面である。この思いこそ、Nさんの信念の核となっている感を受けた。

ある中学生がこの本をきっかけに自殺を思いとどまったんですよ、そういう事例があって、じゃあ、なんでだと思っただけで、分からないというので、その絵本を読んであげて、読むと、この絵本は色がないんですよ、暗闇の時代を同じ時代と思っていたんだけど、春が来て、一輪の花を黄色い一輪の花を見て、自殺をやめようと思ったって、やっぱり何かこの子には一輪の花が光に見えて、光がある限り私は生き続けようと思ったんだと思います。⑫それぐらい本というのには力があるし、本によって人生が変わってしまうこともあるんだよって言ったら、国語の先生もそうそうばくも『坊っちゃん』を読んで先生になろうと思ったんだよ。（本というのは）すごい力あるからやっぱりそういう絵本に出会ってほしいなあって言ったら、「本はどうして読まなければいけないと思う？」って、「今まで考えたことある？」って聞いたら、「ない」っていうので、空気と水とそれなりの食べ物があれば人間は生きていけるけど本を読まなくても日々生活しできるし、過ぎていってしまうけど、本はどうして必要なんだろうか？—（中略）—熊本で災害（2015年4月の熊本地震）があった時にその物資の中に、本とか絵本が入っていたんだよという話をして、⑬それは今からこの人たち

ゼロから始めるんだけど、生きていかなくてはならないので、生きていくためには望みがないとだめ、やっぱり先に進むには心を育てていく必要があるんです。だから本を読んで心を育て、次に進むこともあると思います。

ここでは、前半で本に救われた事例が語られ下線⑫で本が持つ力のすばらしさが語られている。後半では本を読むことの意義が語られている。下線⑬にあるように、生きるための原動力になりうるということが語られているわけだが「次に進む」という言葉に力強さを感じる。

読書指導において重要なのは児童生徒に読書の意義をどう理解させるかということであるが、このNさんの語りは、その示唆を与えてくれていると言える。

### (3)「読書指導実践」

Nさんが語ってくれたH中に赴任するまでに取り組んできた読書指導実践は以下の通りである。

- ・図書館だより
- ・読書指導の教育課程の位置づけ
- ・図書の紹介
- ・図書館日誌

#### ○図書館だより

図書館だよりは、どこの小中学校でも取り組んでいることで、目新しい活動ではない。しかし、Nさんの語りによると、新着図書は必ず紹介している点と、教師用にも出している点が注目される。新着図書の紹介によって、生徒を通じて保護者に伝わり、生徒を介して保護者も読むということがあるという。

中学校の場合、地域の図書館で人気がある本も用意されていることがある。すると、保護者はわが子を通じて本を借りることをもあるとい

うのである。確かに地域の図書館では予約が多い本はかなり待たなければならない。しかし、学校図書館でなら、比較的早く借りられることもあるというわけである。

そこには、Nさんと生徒の後ろにいる保護者とのつながりが感じられ、読書を保護者へも届けたいという思いは注目される場所である。

そして、教師用にも図書館だよりがあるというケースはほぼないのではないだろうか。Nさんは教員との関係づくりにも腐心しており、学校教職員の一人として取り組んでいる点は、大いに参考にすべきではないだろうかと考える。

#### ○読書指導の教育課程の位置づけ

これについても、現在全国の小中学校で、読書指導は教育課程に位置づけられている。「朝読書」「保護者、ボランティアによる読み聞かせ」「読書指導のガイダンス」等である。その中でも、Nさんは4月に設定されている「ガイダンス」を自ら考えて行っている。

#### ○図書の紹介

Nさんは新聞の切り抜きなどで、彼女自身が興味を持った本があれば、必ず読んで、おもしろければ生徒に紹介しているという。特に「旬の話題を朝紹介しているんですけど」と語っているが、「旬の」という言葉に新鮮な図書情報であることが感じられる。そして、おもしろいと感じたら、逡巡することなく紹介していくスピード感があり、このことが図書紹介には必要な要素なのかもしれない。

#### ○図書館日誌

図書館日誌には、その日の来館者数や貸し出し冊数が記録されている。Nさんはこの記録を分析し、来館者や貸し出し冊数を増やす方を常に考えているということであった。

### 3. 結論

Nさんの語りから、読書指導者としてもつべき読書指導観がある程度明らかになった。今後、教員が読書指導を行っていく上で、重要な知見が得られたと考える。以下に示してみたい。

#### 3.1 Nさんの読書指導観

Nさんの読書指導観については、4つにまとめることができる。

##### ○読者である生徒との信頼関係

学校現場において、生徒との信頼関係は必要十分条件である。Nさんにとっても読者であり、生徒である彼らとの関係づくりは必須だと考えている。しかもNさんは、個人的にも関係を築くことで、相手を明確にした読書指導を行っている。それは本を借りに来る生徒に対して名前を呼んで接する姿にも垣間見られる。生徒の信頼を得た上での読書指導は、あらゆる教育活動における指導全般に言えることである。特に図書館補助員という週に3日程度午前中のみ勤務にして、ここまでの関係づくりは特筆に値する。

これが学級担任であれば、生徒との信頼関係が前提条件であることを考えると、読書指導において読者である生徒との人間関係づくりは重要な基盤である。

##### ○応答関係を大切にしたい読書指導

信頼関係を前提にした上で、Nさんは生徒が来館すれば頻繁に声をかけている。生徒との応答関係によって、Nさんは具体的な行動としてつながろうとしているし、実際、生徒とつながっている。本を介しての応答関係が主であるが、生徒と直接対話することで、信頼関係をより醸成させていっていると言える。

##### ○自分の居場所としての図書室

Nさんは、学校図書館を自分の居場所として

構築している。自分が居心地よい空間であれば、生徒も居やすいであろうという考えである。実際、生徒にとっても癒しの空間として機能している。

Nさんは、他人の手が入った図書室では、そこに居させられているという感覚があるという。自分の手が入っていることが大切なのだと語っている。他人の手ではない、自分の手を入れているという自負が図書館経営の基本的な考えであると言える。

##### ○本を読むことの意義

最もNさんの読書指導観の中核を成しているものである。本を読むことの意義をNさんなりに持っていることと、それを4月当初に、ガイダンスで設定しているところが重要である。本はよく人生を豊かにするものであると言われるが、Nさんは具体例を示しながら、生徒に伝えている。指導方法として具体で示す、この方法は生徒には効果的である。

これらの読書指導観はNさんの信念とも言えるものである。そして、この読書指導観に裏付けされた実践が語られている。

#### 3.2 Nさんの読書指導実践の知見

実践の多くは一般的に行われている実践方法ではある。しかし、具体的に語っていただくことで、そこには実質が伴った実践が行われていることが見えてきた。その知見は以下の通りである。

○生徒、教員を読者指導上の対象者として明確に意識していること。

信頼関係、応答関係で述べたが、目の前の読者である生徒に直接に関わりを持っているが、Nさんは図書館だよりにおいても相手が見えている発信をしている。そこには生徒だけでなく、



保護者へのメッセージも考えた内容を盛り込んでいる。しかも、教員に向けての図書館だよりも発行している。読書を教員にも広げたいという意識が働いているのだろうが、Nさんには明確な相手意識があることの証左である。

○常に新情報を関知し、読書を自ら楽しみ、それを根拠に図書紹介をしていること

自分がおもしろいと思わないと、勧められないという考えのもと、常に書評などの図書情報を更新している。話題性のある本には早期に読書して、生徒に情報を与えている姿は教員も見習いたいところである。

○仲間とともに自らのスキルアップしていること

自分なりの読書指導力をスキルアップさせるために、官制研修に参加し、読書指導に関する仲間を結成して、交流を行っている。また、前任校では、食育、健康、読書の連携研究をしており、読書が持つさまざまな可能性を追求している姿は、読書指導への構えであり、向上心として持つべきである。

以上がNさんのインタビューの語りから得られた読書指導観及び実践指導の知見である。学校現場の教員は多くの教育活動があり、読書指導はそのうちの一つでしかないのは事実である。しかし、次期学習指導要領でも、学習活動の原動力として、さらに読書活動の充実が期待され、推進されようとしている。

今後も読書指導に熟達した指導者を取材し、教員の読書指導力の向上に寄与していきたいと考える。

## 脚注

<sup>1</sup> 2001年に議員立法として「子どもの読書活動の推進に関する法律」が成立、公布・施行さ

れ、法的整備がなされた。2011年には「国民読書年」として、国民的なキャンペーンが行われた。

<sup>2</sup> 増田信一『読書指導実践史』学芸図書、1997、pp. 286-337によれば平成初期を「新しい読書教育を目指す時代」として情報化社会の到来と、学習指導要領における「読書活動の充実」を踏まえて、p. 303「教師主導型の読書指導から、学習者自身の学習意欲や学習目標を中核とした読書が学習への転換を、早急に図らなければならない。」として「読書学習学」が必要であると提唱していた。現行でも次期の学習指導要領でも、読書の学習機能を発揮した取り組みがなされている。

<sup>3</sup> 立田慶裕編著『読書教育の方法』学文社、2015、pp. 24-25によれば、司書教諭の必置により、学校図書館の充実、学習との連携等、期待されたが、2013年6月の「国立青少年教育振興調査」によると、授業時数減等の職務軽減措置が採られていないという回答が約85%に及び、依然として学校現場では学級担任との兼任は難しいという声が多い。もちろん、両立できている教員もいるので、是非その声を調査したいところではある。

<sup>4</sup> ライフストーリー分析の方法については、以下の書籍を参考にさせていただいた。理論編として、桜井厚『インタビューの社会学』せりか書房、2002。ジェイムズ・ホルスタイン ジェイバー・グブリアム 山田富秋・兼子一・倉石一郎・矢原隆行訳『アクティブ・インタビュー』せりか書房、2004。桜井厚・小林多寿子編著『ライフストーリー・インタビュー』せりか書房、2015。実践論としては、大久保孝治『ライフストーリー分析一質的調査入門一』学文社、2009。である。

<sup>5</sup> H市は他の地域に比べ、子どもの読書活動推進計画が策定された時期から、比較的早く図書館教育、読書教育に取り組んでいる。現在図書館補助員は全小中学校に配置されているという。勤務は週3回、半日程度である。業務は貸し出し、蔵書管理、教室と図書館との連携、学習支援等が行われている。

<sup>6</sup> 上田裕太、磯崎哲夫「理科教授の目的・目標についての信念の発達に関する研究：5名の熟練理科教師のライフストーリーの分析から」学習システム研究(3), 2016, pp. 13-25. において、信念を「経験や既存の知識に基づく理科教師の個人的な考え」と定義し、「授業実践に影響を与えるだけでなく、専門的成長を遂げるための要素の1つ」と捉えている。本稿におけるNさんの信念の捉えについても、本論文の考えを援用している。

<sup>7</sup> 立田慶裕編著『読書教育の方法』学文社, 2015, pp. 106-107 によれば、このことはオルデンバーグの「第三の場所」を援用する形で「学校図書館は、教員にとっても、子どもにとっても、過程、学校の教室以外の居心地の良い第三の場所として存在することが期待される。」と指摘している。図書館が「第三の場所」としての機能があることは、今後重要な機能の一つとして考えていく必要がある。

## 参考文献

- 大久保孝治『ライフストーリー分析—質的調査入門—』学文社 2009
- 桜井厚『インタビューの社会学』せりか書房, 2002.
- 桜井厚・小林多寿子編著『ライフストーリー・インタビュー』せりか書房, 2015.
- ジェイムズ・ホルスタイン ジェイパングブリ

アム 山田富秋・兼子一・倉石一郎・矢原隆行訳『アクティブ・インタビュー』せりか書房, 2004.

立田慶裕編著『読書教育の方法』学文社, 2015.

文部科学省『平成20年 小学校学習指導要領解説 国語編』東洋館出版, 2008.

上田裕太・磯崎哲夫「理科教授の目的・目標についての信念の発達に関する研究：5名の熟練理科教師のライフストーリーの分析から」学習システム研究(3), 2016, pp. 13-25.

国立青少年教育振興機構「子どもの読書活動と人材育成に関する研究」 「【教員調査ワーキンググループ】平成25年6月報告書」 2013.